

破 約

一

約

『私死ぬ事かまひません』死にかけて居る妻が云つた。——『ただ一つ氣にかかる事があります。私の代りにこのうちへ誰が来るでせう、それが知りたい』

『愛する妻』悲しんで居る夫は答へた、『誰も代りなどは入れない。もう決して、決して再婚はしない』

破

かう云つた時は、彼は心から云つたのであつた、今失ひかけて居る女を愛してゐたからである。

『武士の誓にかけて？』かすかな微笑をもつて彼女は尋ねた。

『武士の誓にかけて』彼は答へた、——彼女の青白いやせた顔を撫でながら。

『それなら、あなた』彼女は云つた、『あなたは私を庭に埋めて下さいね、——いゝでせう、——あの向うの隅に、私達が植ゑたあの梅の林の近くに。私は先からこの事を頼みたかつたのですが、もしあなたが再婚なさると、そんな近いところに墓のあるのがおいやでせうと思つたのです。今あなたが再婚しないと約束なさつたから、——それで私遠慮しないで私の願を申します。……私

お庭に埋めて欲しい、時々あなたの聲が聞かれるでせうし、又春になつたら花が見られるでせうから』

『好きなやうにして上げる』彼は答へた、『しかし今からそんな葬式の話は止めよう、もう駄目と云ふ程重いわけでもないのだから』

『駄目ですよ』彼女は答へた、——『今日朝のうちに死にます。……しかし庭に埋めて下さいませぬ』

『宜しい』彼は云つた、——『私共が植ゑた梅の木の影の下に、——そしてそこに立派な墓をたてて上げる』

『それから小さい鈴を一つ下さいませんか』

『鈴——？』

『はい、棺の中へ小さい鈴を入れて下さい、——巡禮のもつて居るやうなあんな小さい鈴。あんなのを下さいませんか』

『上げよう、そんな小さい鈴を、——それから何か外に欲しい物は』

『外に何もありません』彼女は云つた、……『あなた、いつでもあなたは私に大變親切にして下さいました。もう安心して死なれます』

それから妻は瞑目して死んだ、——丁度疲れた子供が寝込むやうに無造作に。死んだ時美しい顔をしてゐた、そして顔に微笑があつた。

彼女は庭園に、愛した樹の影の下に埋葬された、そして小さい鈴と一緒に埋められた。墓の上に家の定紋の飾りのある、そして『慈海院梅花明影大姉』と云ふ戒名のある立派な石碑がたてられた。

* * *

しかし妻の死後一年たぬうちに、その武士の親戚や友人は、彼に再婚を迫り出した。『未だ若い』彼等は云つた、『そして一人息だ、子供がない。武士は結婚すべき義務がある。子供がなくて死んだら、祖先を祭つたり、供物をしたりする事を誰がするか』

澤山のそんな申し立てによつて、彼はたうとう再婚するやうに説破された。花嫁は僅か十八であつた、そして庭にある墓の沈黙の非難があつたが、深く彼女を愛する事のできる事が分つて来た。

二

結婚後七日目までは、若い妻の幸福の邪魔が起らなかつた、——七日目になつて、夫は夜、城につめて居る事の必要な或役を命ぜられた。獨り留守居をせねばならなかつた第一夜に、妻は説明のできないやうな不安を感じた、——理由は分らないが、何だか妙に恐ろしかつた。床につい

ても眠られなかつた。何となしにあたりは重苦しかつた、——嵐の前に時としてあるやうな一種名狀し難い重苦しきであつた。

丑の刻に、彼女は夜外の方で鈴の鳴る音を聞いた、——巡禮の鈴であつた、——そして彼女は今頃何の巡禮が士族屋敷を通るのかと不思議に思つた。やがて、暫らく休んでから、鈴がもつと近くひびいた。明らかに巡禮はこの家に近づいて来るのであつた、——しかし何故道もない裏から近づいて来るのであらうか。……突然犬が妙な恐ろしさうな風に吠え泣きをし出した、——そして夢の恐怖のやうな恐怖が彼女を襲うた。……その鈴の音はたしかに庭であつた。……女中を起しに起きようとした。しかし起きる事もできない、——動く事もできない、——聲をあげる事もできない事が分つた。……そして近く、段々近く、鈴の音が聞えて来た、——そしてあゝ、その犬の吠えやうはどんなであつたらう。……それから影がそつと忍んで来るやうに、その部屋へ一人の女がそつと入つて来た、——戸と云ふ戸は皆固く閉ざされたまま、それから、ふすまが動きもしないで、——經かたびらを着て、巡禮の鈴をもつた女が。死んでから餘程になるから、眼はない、——そしてほどいた髪の毛は顔の廻りに長く垂れてゐた、——そして彼女はその亂れた髪の毛の中から眼なくして見、舌なくして語つた、——

『いけない、このうちにゐてはいけない。未だ私はこのうちの主婦だ。出て行け、そして出て行く理由を誰にも云つてはいけない。もしあの人に云つたら、八つ裂きにする』

さう云つて、その幽霊は消えた。花嫁は恐怖のために正氣を失つた。あけ方まで彼女はそのままになつてゐた。

それでも、楽しい日の光を見ると彼女は見たたり聞いたたりした物の事實を疑つた。云つてはならないと云はれた事の記憶は未だ彼女をそんなにひどく悩ましてゐたので、彼女は夫にも誰にも、その幽霊の事を話す氣にはなれなかつた。しかし彼女はただ恐ろしい夢を見て病氣になつたのだと自分で納得する事が大方できた。

しかし、翌晩は疑ふ事はできなかつた。再び丑の刻に犬が吠え泣きを始めた、——再び鈴がひびいた、——庭の方から徐ろに近づいて、——再び、聞いて居る彼女は起きて呼ぼうとしたが駄目であつた、——再び死者は部屋に来て、小聲で叱つた、——

『出て行け、その理由は誰にも云つてはならない。もしあの人にそつとでも云つたら、八つ裂きにする。……』

今度は幽霊は床の近くまで来た、——そして床の上で屈んで、つぶやいて、變な顔をして見せた。……

翌朝武士が城から歸つた時、彼の若い妻は彼の前に平伏して歎願した、——

『お願です』彼女は云つた。『こんな事を申上げるのは恩知らずで、失禮ですが、赦して下さい、しかし私を里へ歸して下さい、——今すぐ歸して下さい』

『ここに何か面白くない事があるかね』夫は心から驚いて尋ねた。『誰か留守中に何か意地の悪い事でもしたかね』

『そんな事ぢやありません——』彼女はすすり泣きをしながら答へた。『誰でも皆、ここでは私に大變親切にして下さいます。……けれども、私は續いてあなたの妻になつて居られません。——私出て行かねばなりません。……』

『困つたね』彼は非常に驚いて叫んだ。『このうちで何か面白くない事があるのは甚だ残念だ。しかし出て行きたい理由が分らない、——誰か大變不親切な事でもしない以上は。……本當に離縁してくれと云ふつもりでないだらうね』

彼女は震へながら、泣きながら答へた、——

『離縁して下さいならなければ、私は死にます』

彼は暫らく黙つてゐた、——どうしてこんな驚くべき事を云ひ出したのであらう。その理由を考へて見ても駄目であつた。それから何の感情をも面に表はささないで答へた、——

『何も缺點のないお前を両親の方へ送りかへすのは恥づかしい行であらう。何かさうして貰ひたい相應な理由を云つてくれたら、——どんな理由でも、わけの分る理由なら宜しいから、——私

は離縁状を書く事ができる。しかし、理由、——相應な理由がなければ、離縁するわけには行かない、——私共の家の名譽は世間の人の口の端にかかつてはならないから』

そこで彼女は云はずには居られなくなつて來た、そして彼女は一切の事を告げた——恐怖の苦痛のうちにつぎのやうに云ひ足した、——

『もうあなたに話しましたから、私は殺されます、——殺されます。……』

勇敢な人であり、又お化けなどを信ずる人ではないが、武士は一時非常に驚いた。しかしその事の簡単な自然の解決が心に浮んで來た。

『お前は』彼は云つた、『お前は今大層神經を起して居る、誰かつまらない話をした者があるのぢやないか。ただこのうちで、變な夢を見たと言ふわけで、離縁するわけには行かない。しかし留守中にこんな風に苦しんでゐたのは、本當に氣の毒だ。今夜も又城へ行かねばならないが、お前一人にしては置かない。お前の部屋にゐて、寝ず番をしてくれる武士を二人云ひつける、そして、安心して寝られるだらう。二人ともよい人だから、できるだけの注意をしてくれる』

それから、夫がそれ程思ひやり深く、又それ程情け深く話してくれたので、妻は自分の恐怖が殆ど恥づかしくなつて來た程であつた、そしてこの家に止つてゐようと決心した。

若い妻の保護を託された二人の武士は、大きな、強い、心の單純な人達であつた、——女や子供の保護者として經驗のある人々であつた。彼女の氣を引立てるために、花嫁に面白い話を聞かせた。彼女はこの人達と長い間話した。彼等の面白いおどけで笑つた、そして殆ど彼女の恐怖を忘れた。いよいよ眠るために床についた時、二人の武士はその部屋の一方で屏風のうしろに陣取つて碁を始めた、——彼女の邪魔にならないやうに、小聲で話してゐた。彼女は赤兒のやうに眠つた。

しかし又、丑の刻に彼女は恐怖のうめきをもつて眼をさました、——例の鈴を聞いたのであつた。……それはもう近くに來てゐた、そして段々近くなつて來た。彼女は飛び上つた、彼女は叫んだ、——しかしその部屋に動く物はない、——ただ死の如き沈黙、——段々と増して行く沈黙、——段々と濃くなつて行く沈黙、——があるだけであつた。彼女は武士のところへ飛んで行つた、彼等は碁盤の前に、——動かないで、——銘々相手を坐つた目附でにらんでゐた。彼女は彼等に叫んだ、彼等をやり動かした、彼等は凍りついたやうになつてゐた。……

あとで彼等の云つたところでは、彼等は鈴を聞いた、——花嫁の叫びも聞いた、——起さうとして彼女がゆり動かしたのさへも知つてゐた、——そしてそれにも拘らず動く事も、物云ふ事もできなかつた。その時から彼等は聞く事も、見る事もできなくなつた、黒い眠りが彼等を捉へたのであつた。

夜明けになつて、主人は花嫁の部屋に入つて、消えかかつた燈火の光で、血の溜りの中に寝て居る若い妻の首のない死骸を見た。やはり未だ打ちかけの碁を前にして坐りながら二人の武士は眠つてゐた。主人の叫びを聞いて彼等は飛び上つた、そしてぼんやり床の上の恐怖すべき物を見つめてゐた。……

首はどこにも見當らなかつた、——そしてその物すごい疵は、それが斬り取られたのでなく、もぎ取られた事を示した。血のしたたりはその部屋から縁側の角まで續いて、そこで雨戸は引裂かれたやうであつた。三人はその跡をたどつて庭に出た、——草地を通つて、——砂場を超えて、——廻りに花菖蒲のある池の岸に沿うて——杉と竹との暗い蔭の下へ。そして不意に曲つたところで、彼等は蝙蝠のやうに嘲る魔物と面と向つて立つて居る事に氣がついた、即ち長く埋められた女の姿が、墓の前に棒立ちになつて、——^{一方}の手に鈴をつかみ、他方に血の滴る首をもつて居るのであつた。……暫らくの間、三人は痺れたやうになつて立つてゐた。それから一人の武士は念佛を唱へながら、刀を抜いて、その姿を打つた。直ちにそれは——經かたびら、骨、及び髪の毛の空しい散亂となつて、——地上に崩れた、——そして鈴はその崩壞のうちから、チリンと鳴つて轉がり出た。しかし筋肉のない右の手は、手首から離れながら、なほ放たないで、——その指はやはり血の滴る首をつかんで、——そして黄色の蟹の缺が落ちた果物をつかんで放たないやうに——爪をたてて、さいなんでゐた。……

* * *

『これはひどい話だ』私はそれを物語つた友人に云つた。『一體復讐をしたければ、その死人は、男に對してすべきであつた』

『男はさう考へます』彼は答へた。『しかし、それは女の感じ方ぢやありません、……』彼の云ふところは正しかつた。

Of a Promise Broken. (A Japanese Miscellany.)

(田部隆次譯)